

第二十八回

代えて貰えない包帯の下からは膿が流れはじめ、彼女を殴った者は皆から大いに恨まれる破目になつた。

殴った男は英語のできる患者に連れられて看護婦中尉のところに詫言に行き、なせば殴ったかを日本の慣習によつて説明して平身低頭、誠意をつくして謝した。

中尉も初めて風習のちがいを悟つたらしく、翌日から態度もがらりと変わつてやわらかく親切になり、また治療をしてくれるようになった。

殴った方の男は今度はかえつて彼女から男らしい男と思われようになつたらしく、消灯になるとこの看護婦中尉に車付きでどこへ何処か入連れ去らね、朝になると戻つて来た。

看護婦中尉殿は特にこの大和男子に執心になつた。その後、彼の枕元にはリンゴやチョコレートなどが絶えなかつた。戦争の陰に咲いたちよつと羨ましい花びらとしてここに紹介した。

事件後

私は腕に十三センチの引きつた傷跡を残して、キャンプに戻つた。

キャンプ内は、仲の良かった班員が病院から戻らずに、あいつが死んだ、こいつが死んだといふ話で静まり返つていた。これ以後、反抗しようと言つる者はいなかつた。

事件後、捕虜条約に従つて、一月間に一度、国際赤十字のボツサード博士が収容所の見回りにやつてくるようになった。

事件当時のキャンプの所長は更迭され、ユージーランドの現地人、マオリ族出身の少佐にかわつた。その後、われわれの方が少々自分勝手と思えるような不平不満までボツサード博士はよく聞いてくれ、キャンプ内は徐々に改善されていった。

例えば、日本人はパンでは力が出ない、米の飯を食わせろ、魚も食べたいといえは、一週間に一回出るようになった。また、夜中にユージーランドの兵隊が一人番兵に立ち、淋しくなつたのか、ハローを吹いた。その音がうるさくて眠れないから止めさせてくれと言えば、すぐに誰が吹いていたかを調べ上げ、所長自らが善処するようになつてくれた。

ボツサード博士はわれわれに故国へ手紙を出して、家族へ無事であることを知らせて安心させなさいと、しきりに勧めてくれたが、われわれは笑うだけで誰一人出す者はいなかった。日本軍兵士として、捕虜になっていることなど、故国へ知らせるわけにはいかなかった。偽名で出すわけにはいかなかった。西洋人は捕虜になっても故国へ手紙を出すのかと、日本人とのもの考え方のちがいに驚かされた。

ニュージールランド側は事件以来、われわれと以前よりずっと親しく接するようになっていた。規則はあるにはあるが、以前ほどうるさくはなかった。

一日置きの作業が始まっていたが、雑草とりでつかまえた針鼠を飼う者がいたり、蜜をとるのだと、蜜蜂の巣を持ち帰った者がいても、ニュージールランド側はとがめだてしなくなら

た。
キャンプ内ではアルコール切れ物一切禁止であったが、また暴動が起きたときには今度は素手では戦えないと、作業労働で外へ出たときに拾ってきた鉄製の金具で、三十センチくらいの短刀、あいくちのようなものを各人がつくりはじめていた。

刃物造りは、ニュージールランド兵が恐がって絶対に入ってこない夜、電気もないなかで行われた。食事であまらせたバターを缶に溜込んで布を浸し、火を点けてロウソク代わりにした。窓へ服を掛け、あかりの漏れを防いで刃物造りに懸命になつた。

つづく

次回第二十九回は六月二十二日(火)の予定